

職員の皆さんへ

いよいよ 11 月です。

先月は長崎がんばらんば国体の開催をはじめ全国規模のイベント開催、平戸市ならではの魅力ある事業が数多くあり大変お疲れ様でした。

特に本市においては、会場として相撲と軟式野球の 2 種目が開催されたこと、また長崎県チームが男女総合優勝として天皇杯の荣誉に輝いたことは、その原動力の一つに、本市出身選手の鋭い気迫と磨かれた技量の発揮があったことなど、誠に喜ばしい出来事が多くありました。

そして、去る 28 日から 29 日までの 2 日間、「第 17 回全国風サミット in 平戸」が『地方から世界へ！そして未来へつなげる再生可能エネルギー』のテーマの下に、経済産業省資源エネルギー庁担当官をはじめ全国の関係自治体から多くの方々や一般の皆様にご参加いただき、本年 9 月に全国の自治体に先駆けて「CO2 排出ゼロ都市宣言」を行なったわが平戸市一円を舞台に開催いたしました。予想を超える参加者や深く掘り下げた議論をもとに幾つもの成果が導かれたことは誠に意義深く、いままさに国家戦略の大きな柱の一つであるエネルギー政策の推進に対して地方の熱意と声を届けることができたと思っております。

これまでの事業のすべてが順調かつ有意義に開催できたことは、職員各位の熱意と責任ある行動の結果にほかならず、常に「主役である市民」と心をつなげて取り組んだ実績により達成できたことであり、これをもって今年度に予定していた重要事業の大半もほぼ達成できたものと思っております。

さて今月から年末にかけては、新年度の予算編成作業に入ることになりますが、9 月定例市議会でも確認できたように、人口減少をいかに食い止めるかということと、それを解決に導く産業振興をいかに支援していくかという大きな課題に立ち向かわなければなりません。

すでに平戸市人口減少対策本部が設置され、それぞれの立場において具体的な戦略づくりに取り組んでおられますが、あくまで市民の皆さんとの問題共有のもと、ともに解決に漕ぎ出すという結束が前提になれば意味がありません。これまでも市民感覚としていささか「行政まかせ」「行政頼り」の要素があったと感じられますが、その感覚をブレイクスルーしていくためには、行政側が提示する制度設計そのものにも柔軟性や顕著な効果を生み出す裏づけが求められると思っております。

そして改めて「人口減少」への解決を図るのですから、これまで続けてきた事業の成否はともかくとして、この際、思い切って効果の薄かった事業や今後

もその広がり期待できない事業は縮減するという思い切った決断も必要だと思います。そして他の自治体ですら考えたこともないアイデアでも市民のために良策と思われる事項は拾い上げるなど、虚心坦懐に検証し事業化する心構えも必要ではないかと考えます。

ここにインターネットサイトで紹介された注目すべき文章を掲載します。
題して「高校生が地元に残らない3つの理由」というものです。

.....

【理由そのⅠ】

地域の良さを理解する機会がなかったこと。外に出て初めて地元の良さがわかったりします。しかしその時には外にいて、なかなか地元の良さを理解する機会がない。地元について何がいいかわからない自分が果たして地元に戻っていんだらうか？ そう思う若者は決して少なくありません。

【理由そのⅡ】

地域の人とつながる機会がない。同世代の高校生、そして地域で活躍している先輩方。若者は一旦地元を出てしまうと、こうした方々とのつながりを持つことは難しいです。そして、こうしたつながりを持っていない若者が何か地元でやっと思いこうと思ってもなかなかできない。仲間がいない。そういった悩みがありました。

【理由そのⅢ】

未来を作る方法を学んだことがない。地元に対して何かしたい、でもどうすればいいんだらう？ そんなこと今まで学んだこともなかった。こうした若者もかなりいました。

「地元を理解する機会がない」「地元とつながる機会がない」そして、「地元の未来を開く方法を知らない」。これが「高校生が地元に残らない3つの理由」です。

.....

この文章を読んでいかがでしょうか。

私たちは若い世代とどのように向き合い接してきたかを今一度考え直すべきだと思います。高校教育は県の所管だからと言って遠ざけていなかったかどうかをはじめ、これからの関わり方についても上記文章は一つの示唆を与えてくれると思います。

一方で、本市では、地元高校生に参加してもらおう機会をたくさん用意していますし、すでにたくさんの高校生ボランティアの参加により、国体の運営や数多

くのイベント、そして楽器演奏やダンス披露まで協力していただいています。

確かに「参加してもらおう」「実践してもらおう」ということを実績として積み上げていますが、そうした活動を通じて「意見を聞く」「一緒に考える」ということをどれだけやってきたか考えなければなりません。

私たちの施策も、住んでいる大人のための事業に偏っているのではないか、あるいは今の時代だけを乗り切ればいいのではないか、という将来展望につながる、希望が描けないものになってはいないかということを検証することが必要だと思います。

既得権や固定観念にとらわれない柔軟な発想とこれらを受け入れる大らかな寛容性が必要です。そしてそうした心構えは、若い世代のみならず、あらゆる世代や障害をお持ちになっている方々、そして外国人からも高い評価を得られるものと確信します。

誇りと自信を抱いてもらえるようなまちづくりを私たち平戸市行政に携わるものが率先して描いていかなければなりません。そしてそれが必ずできるという遺伝子を私たちは受け継いでいると確信します。いつの時代も平戸からあらゆる「事始め」がスタートしていることがその証拠です。

職員皆様のご努力に期待します。

平成 26 年 10 月 31 日

平戸市長 黒 田 成 彦